
コガメ と カエル

伽砂杜ともみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ガメとカエル

【NZコード】

N8048D

【作者名】

伽砂杜ともみ

【あらすじ】

小さな池の、「ガメとカエル」。楽しいことは、なんだろう?なりたいものは、なんだろう?いつかはでっかく、なるために。完結済み。

広い公園の中に、小さな池がありました。

そこに、『ガメとカエル。

そして、お魚がたくさん住んでいました。

『ガメは『けること』が大好き。

公園で人間のこどもが、サッカー ボールと一緒に遊んでいるのを、
池からよく見ていました。

「大きくなつたら サッカー ボールになるんだ」

カエルは『動くこと』が大好き。

『ガメと一緒に公園へ行つては、白と黒の、キレイで早く動くサ
ッカー ボールに、あこがれています。

「大きくなつたら サッカー ボールになるんだ」

『ガメとカエルは、とっても仲良し。

雨が水をたたく日に、フナのおじさんが『ガメとカエルに、

「夢はあるかい？」

と、聞きました。

「大きくなつたら サッカーボールになるの」

「ガメとカエルは、元気よく答えます。

フナのおじさんは首をかしげて、もう一度、聞きました。

しかし、「ガメとカエルの答えは変わりません。

「サッカーボールといつものさ けるもの なんだよ?」

フナのおじさんがそう言いました、

「うん 知ってるよ」

「ガメとカエルは、声を合わせて つなずきます。

フナのおじさんは困つたようになり口をまげ、池の深いほうへと、泳いでしまいました。

「フナのおじさん なにが言いたかったのかな?」

「ガメはそりゃって、首をかしげました。

「なにが言いたかったのかな?」

カエルもマネして、首をかしげました。

晴れた日に、コガメとカエルは池を出て、散歩することにしました。

ゆっくりと歩くコガメの周りを、ぴょんぴょんと元気よくはねるカエル。

「カエルくんは いいな。早く動けて。もうすぐ サッカーボールになれるのかな?」

カエルは、首を横にふりました。

「まだまだだよ。サッカーボールは、ずっと飛びはねたりしないもの」

「ガメの背中にのぼり、カエルは言いました。

「『ガメくんこそ 背中にサッカーボールのもようがあるね。もうすぐサッカーボールになれるのかな?』

しかし、コガメは首を横にふりました。

「まだまだ。サッカーボールのもようは五角形。ぼくのは 六角形だもの」

「ガメとカエルは、人間のこどもたちに甲羅こうらをたたかれたり、足を引っ張つたりされました。なんとか、公園の外に出ることができました。

「ふう。だいぶ歩いたね」

「ガメは、首を長くしてのびをしました。

カエルは疲れたようすもなく、高くはねています。

と、その時、コガメとカエルの頭の上を飛んでいくものがありました。

「あっ！ あれは、サッカーボールさん！」

コガメとカエルは、同時にさけびました。

キレイなサッカーボールが、道路で一、二回、はずみます。

「あぶないよ。車がくるよ！」

「ガメとカエルは、なんども なんども呼びました。

けれども、サッカーボールは動きません。

「どうして 動かないのかな？」

「どうして 動かないんだろう？」

コガメとカエルは、不思議に思いました。

サッカーボールに心がないことを、「ガメもカエルも知りません。

そこに車が来て、ボールを ぱんとはねました。

サッカー ボールが、コガメとカエルのほうこじりがつてきました。
キレイだったボールは、いまでは黒くなり、空気が抜けて ふに
やふにやになっています。

人間のこどもが、そのボールを見て言いました。

「あーあ。ぼくのボール、もう使えないよ。

「そうだ！ これはもういらないから、新しいの買つてもらおう」

そして、ボールをひろって、行つてしましました。

「ガメとカエルは、しづかにそれを見送りました。

「じもの言葉も、悲しいものでしたが、

泣く」とむ、

車をよける」とむ、

「じにもに悲しみを伝える」ともできない、

そんなサッカー ボールを見て、気づいたのです。

「かなしいね」

「ガメは、池へとかえりながら、ぽつりと言いました。

「かなしいな」

カエルは、はねることをやめて、「ガメの横を歩きました。

フナのおじさんのかつたことが、分かつたよつな気がしました。

それから、何日かが過ぎました。

「イのおばさんが、『ガメとカエルに聞きました。

「夢はある?」

「ガメとカエルは、元気よく答えました。

「大きくなつたら 藻もになるの」

「藻 に?」

「イのおばさんは、田を丸くしました。

「藻になつて ふわふわするの」

「ガメが、楽しそうに言いました。

「池の中を ふわふわするの」

カエルも、楽しそうに言いました。

「コイのおばさんは、困ったように言いました。

「でも お魚に食べられてしまつわよ?」

やつぱり困った顔をした、コイのおばさんの言葉に、コガメとカエルはかんがえました。

「それじゃあ 大きくなつたら……」

ある晴れた、のどかな日。

「ガメとカエルは、かんがえます。

あれもいいね。

これもいいね。

なんだってなれるんだ。と、コガメとカエルの夢は、大きく大き
くふくらみました。

(後書き)

読んで下さって、大変ありがとうございました。
今日より明日の精神で、執筆向上を願いながら、今後も精進してい
きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8048d/>

コガメとカエル

2010年10月10日11時00分発行